# 利用者別フィードバック　個別機能訓練加算

○ 利用者別フィードバックでは、利用者の現在の状況およびその推移を確認することができます。

**<データ解釈時の注意点>**

以下の①～③は、データを解釈する際の注意点です。

① 指標の値及びその変化は、必ずしもケアや状態の良し悪しを反映するものではありません。

② 利用者の背景や利用目的、対象期間中に実施した取組、利用者毎の状況（入院があった、他のサービスを利用していた等）など、様々な要因が関連します。

③ 対象期間中に、利用者にどのような変化があったか、どのような取組を実施したか等の状況も考慮しながら、本フィードバックの結果を解釈し、事業所におけるサービス改善に向けた検討の材料としてご活用ください。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業所番号 | ：9999999999 | サービス | ：サンプルサービス |
| 集計時点 | ：2022年4月　登録分 | | |
| 事業所名称 | ：サンプル施設 | | |
| 利用者番号 | ：000010 | | |

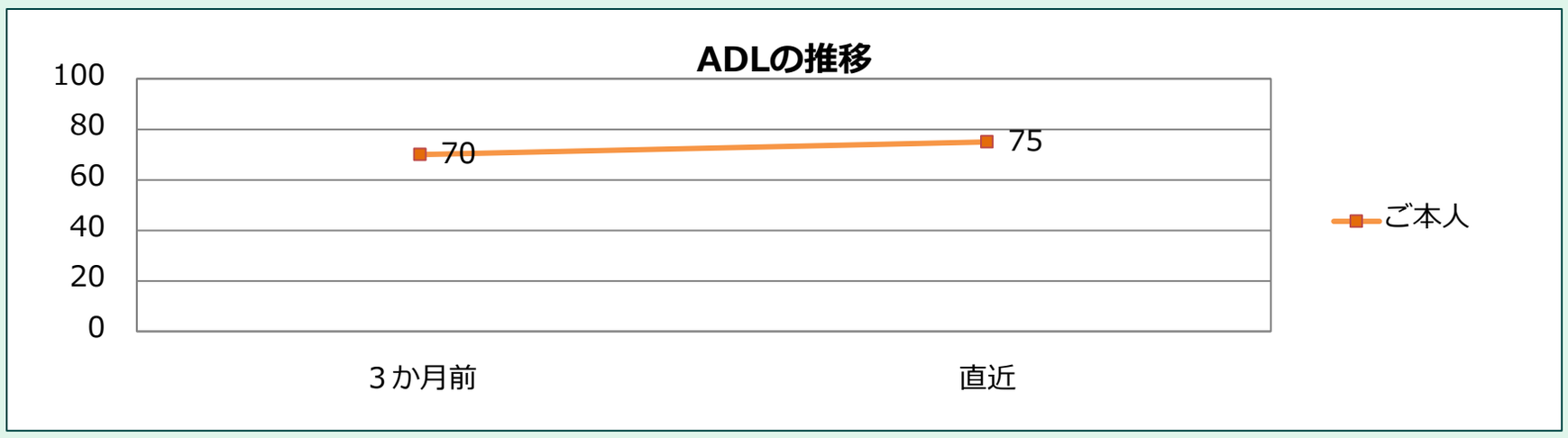
事業所番号　：9999999999　　サービス　　：サンプルサービス　　集計時点　：　2022年4月 登録分
事業所名称　：サンプル施設
利用者番号　：000010
年齢　　：86　　性別　　：男性

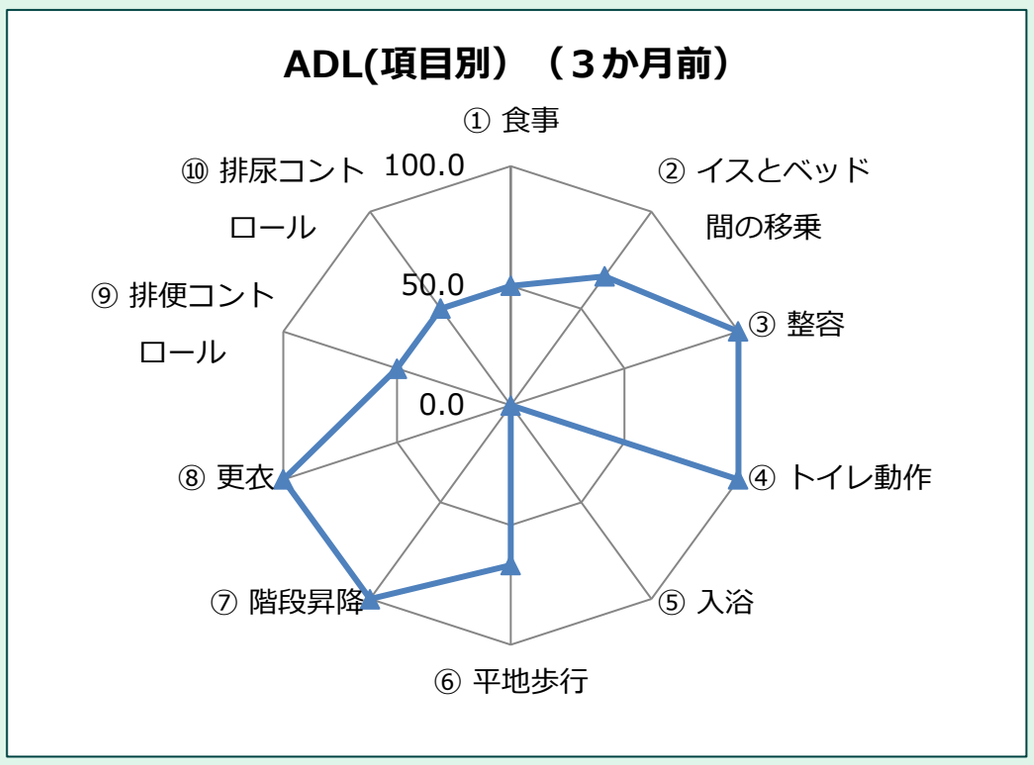
## ■個別機能訓練項目

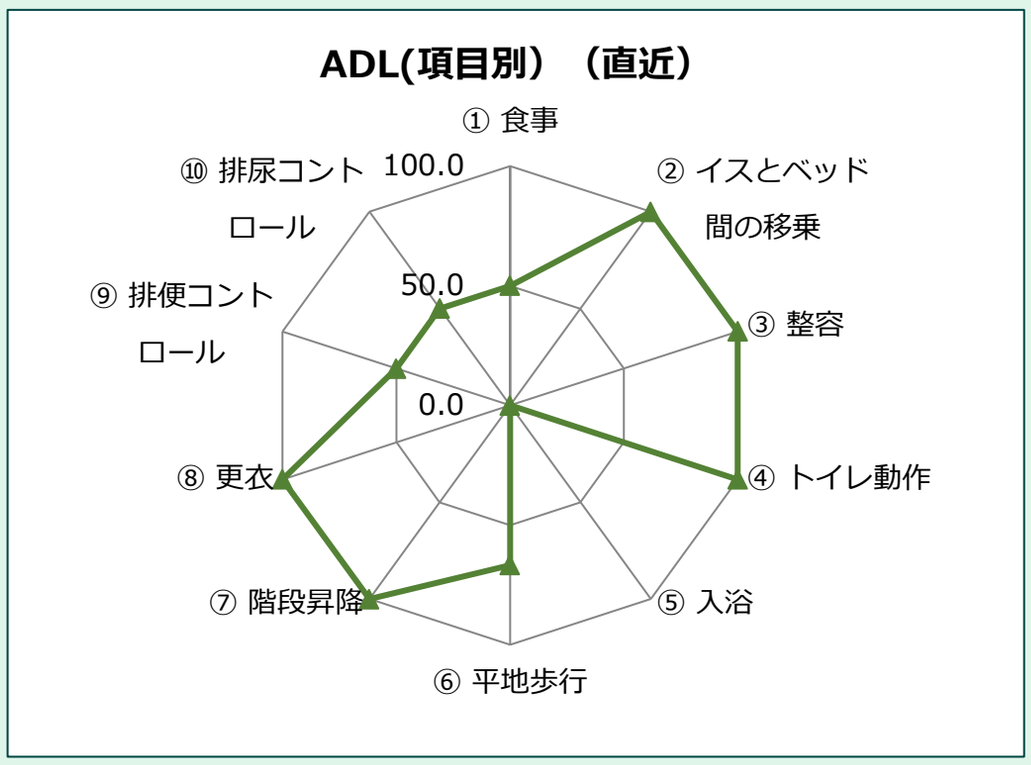
| No. | プログラム内容 | 頻度 | 時間 |
|---|---|---|---|
| 1 | 3 関節可動域訓練 | 週　2　回 | 60　分 |
| 2 | 11 摂食嚥下機能訓練 | 週　3　回 | 30　分 |
| 3 | 18 起居・移乗動作練習 | 週　2　回 | 30　分 |
| 4 | 26 一連の食事行為練習 | 週　3　回 | 30　分 |

## ■日常生活動作（ADL）の評価

※　レーダーチャートは各項目の満点を100%として、ご本人の点数を%で表示しています。



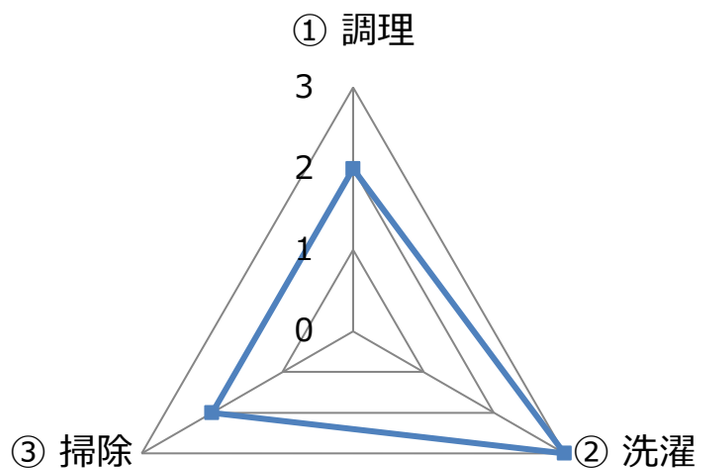




【メモ欄】（事業所内で解釈や考えられる要因などについて議論を行った内容を記載する場合にお使いください。）

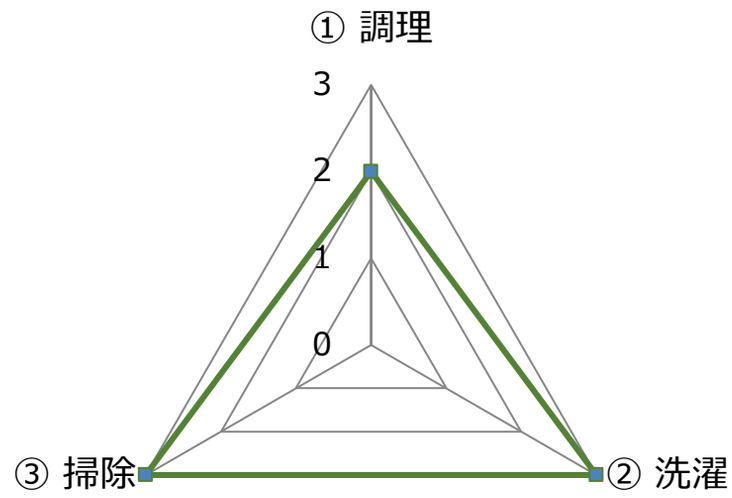
## ■手段的日常生活動作 （IADL）の評価

**IADL(項目別）（３か月前）**




0：全介助　1：一部介助　2：見守り　3：自立

**IADL(項目別）（直近）**




0：全介助　1：一部介助　2：見守り　3：自立

【メモ欄】（事業所内で解釈や考えられる要因などについて議論を行った内容を記載する場合にお使いください。）

■補足

- 日常生活動作（ADL）の評価のグラフの見方

折れ線グラフは、ADLの合計点数の推移を示しています。
（グラフ中の数字が、ご本人のADLの評価の合計点数であり、疾病・障害・環境等のさまざまな要因が影響するものであることにご留意ください。）
レーダーチャートは、折れ線グラフの各時点におけるADL各項目の点数を示しています。
※　グラフの解釈の詳細については、担当の医師・リハビリテーションスタッフにご確認ください。

- 手段的日常生活動作（IADL）の評価のグラフの見方

レーダーチャートは、各時点におけるIADLの各項目の点数を示しています。
※　グラフの解釈の詳細については、担当の医師・リハビリテーションスタッフにご確認ください。

- （参考）ADL（activities of daily living）について

ニューヨーク大学のリハビリテーション科医George Deaver が理学療法士Mary Eleanor Brown とともに提起した概念で、日本リハビリテーション医学会の1976 年の定義では「ひとりの人間が独立し生活するために行う基本的な、しかも各人ともに共通に毎日繰り返される一連の身体動作群をいう」となっている。つまりADL は身辺動作（セルフケア）を指し，家事動作，交通機関利用などの応用的動作を生活関連動作（activities parallel to daily living ; APDL）として区別して用いることもある。また排泄、食事、移動、整容、更衣など生命生活維持に関連した活動を「基本的ADL」（※1）、買い物や食事の支度などを「手段的ADL（instrumental ADL ; IADL）」（※2）、両者を合わせ「拡大ADL」と呼ぶ考えかたもある。禁制やコミュニケーションなど動きを伴う「動作」以外を含めることから、「日常生活活動」と訳されるが、日常生活動作という日本語も用いられる。
（出典：リハビリテーション医学・医療便覧，１．用語解説．公益社団法人日本リハビリテーション医学会監修：リハビリテーション医学・医療コアテキスト，医学書院，2018年より）